神戸新聞 2017年11月30日 木曜日 面名 朝四社 １３ 30ページ

朝来の山口小

福島の児童とネット電話

地元取材し制作 互いの新聞発表

ことまど

自分たちの暮らす地域を取材し、新聞づくりに取り組んできた朝来市立山口小学校（同市羽渕）の5年生と、福島県新地町立駒ケ嶺小学校5年生が29日、インターネット電話「スカイプ」を使い、互いの成果を発表し合った。

両校とも神戸新聞社が開発したクラウド型アプリ「ことまど」を使い、各班で調べた内容を記事や見出しにまとめた。新聞は事前に両校で交換し合い、目を通してから発表会に臨んだ。

山口小は27人が5班に分かれ、但馬地域の温泉やスイーツなどを〝取材〟。「但馬野菜新聞」を作った班は、朝来市の特産・岩津ねぎについて「根深ネギと葉ネギの中間種で軟らかく、とろみがあっておいしい」と紹介した。駒ケ嶺小の児童から「とろみとはどんな感じですか？」と聞かれると、「ネギの内部に卵白のような、トロリとした成分があります」と誇らしげに答えた。

一方、駒ケ嶺小は29人が6班に分かれ、イチジクやイシガレイなど、新地町の名産や東日本大震災後の復興の歩みを新聞に。山口小の米田奈々さん(11)は「文章を考えるのが難しかったけれど、駒ケ嶺小の新聞を読んで、新地町のことがよく理解できた」と話した。

（長谷部崇）

インターネット電話を通じ、新聞の内容を発表し合う児童たち＝朝来市羽渕、山口小学校

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

神戸新聞 2017年11月30日 木曜日 面名 但馬 １３ 27ページ

互いの地域 理解深め

朝来と福島の児童 作った新聞読み合う

ことまど

神戸新聞社のクラウド型アプリ「ことまど」による新聞作りで交流を深めた、朝来市立山口小学校と福島県新地町立駒ケ嶺小学校の5年生。それぞれが作った新聞を読み合うことで、互いの地域についての理解を深め合った。

（30面参照）

駒ケ嶺小が制作した「復興の近道新聞」では、東日本大震災から最近再開したJR常磐線を「お帰り！常磐線！」という見出しで紹介。利用客の期待の声をインタビューし「また、震災前のように、笑顔の輝く駅となるだろう」と記事を結んだ。

山口小の児童が「新地町で立ち入り禁止の場所はまだあるのですか？」と尋ねると、「海岸線は立ち入りできず、今も海水浴はできません」との答えが。駒ケ嶺小学校で1泊し、空き缶で米を炊いたり、段ボールで寝床を作ったりする宿泊体験を伝える記事もあり、「僕たちは震災を経験し、災害が起きたときにどう行動するかを学んでいます」とアピールした。

山口小の原瑚々南（ここな）さん(11)は「駒ケ嶺小の新聞は、細かいところまで書けていて、筆者の思いも感じられていいなと思った」と話した。両校は今後も交流を続けるという。

（長谷部崇）

駒ケ嶺小学校の作った新聞への質問ボードを掲げる児童たち＝山口小学校

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。